

日本労働年鑑 第26集 1954年版
The Labour Year Book of Japan 1954

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第五章 農民組合総同盟の結成まで

第一節 農民組織統一懇談会

一九五一年末の社会党分裂は、農民組織の動向にも波紋をおよぼし、いわゆる反共農民戦線統一運動に新たな一石を投ずることとなった。年内すでに日農主体性派の長老格たる三宅正一、川俣清音両氏が、平野力三氏を中心指導者とする全農の顧問に就任したとの噂がとび、日農主体性派内の右派社会党系と、全農、全農連、それに開拓連をもふくめて、反共農民戦線統一の気配が表面化するにいたった。

統一懇談会開催

五一年一二月二日に、衆議院議員会館で全農(天田副会長、今里常任、稲富福岡県連会長)、全農連(中村幹事長、石川、塩尻、宅下氏等)、開拓連(凌常任)によって「農民組織統一に関する懇談会」が開かれた。その結果、今後「農民組織統一懇談会」を設け、中村(全農連)、佐野(全農)、凌(開拓連)を世話人として統一運動を積極的に推進することになった。

かくて五二年一月一六日参院会館で農民団体懇談会が開催されたが、日農有志として川俣、三宅、中村(高)、松井(福島)、柴田(秋田)の諸氏、全農から中村幹事長、篠原、甲斐、全農から沼田(茨城県連書記長)、田中(福島)、永井、天田副会長、今里常任、稲富、佐野、開拓連から凌、藤生の一七氏が出席、まず川俣氏は懇談会幹旋役の代表として大要次のようにのべた(「農村建設」第二号による)。

「社会党分裂により日農も当然整理段階に移る様な気運にあるが、民主社会主義の理念に立つ有志は農民政治力の今後を憂慮するの余りに農民団体懇談会の幹旋役を努めたのであり、従来の懇談会の経験に鑑み、出来るだけ巧く成就するよう期待する」

これにつづいて、全農の永井氏は、農民団体の統一は農民運動の新しい方針の確立と併行してなされるべきことを強調し、また開拓連は統合はあくまで政治的中立の立場でなされるべきだと主張し、さらに全農連は画一的統一方式を拒否してあくまで連合組織で行くべきことをのべ、各派それぞれ統一問題に対する態度を表明した。結局、各団体それぞれ特殊な内部事情があるので、その自主性を尊重して統一方法はなお慎重に研究すること、今後は統一懇談会に日農有志も参加して、組織的に統一をすすめることを決定した。

なお右派社会党(日農新農村建設派)川俣、三宅氏らは、農民組織統一運動の事実上の推進機関紙として一月一日「農村建設新聞」(月三回刊)を発行したが、同紙第一号の「新農民組織の提唱」なる主張において次のようにのべているのは、川俣、三宅氏ら社会党右派系指導者の、統一問

題に関する基本的な構想がいかなるものであるかを示している。

(新農民組織の提唱)

……今後の新しい農民組織を考えるにあたって、是非とも考慮すべき問題をここに摘記することにする。

一、新しい農民組織の基盤を生産事業または施設におく。

一、その構成はかつての農民組合のように農村の一部の階層に局限せず、ひろく耕作農民の立場をとる。

一、組織形態としては農業経営並びに農民生活の地域的特殊性にかんがみ、中央集権的組織とせず、自主的単位団体の連合組織とする。

一、農民組合と農業協同組合、農民組合と政党との関係を明確にし、職能の分化とその有機的連繋の方式を明らかにする。

社会党右派全国農漁村代表者会議

一月二二日、社会党右派府県連代表約八十名は全国農漁村代表者会議を開いて当面の農村問題、農民組織対策について協議したが、席上三宅正一氏は「容共左派から労働組合を救い、保守反動の魔手から農民を守ることは民主社会主義運動の先頭に立つ者の使命である」と強調し、ついで川俣、三輪氏より本部の農村対策を説明し、討議の結果左の組織対策を決定した。

(一) 農民組合の存する県連はこれを中心として強化し、他の農民団体と共同闘争を通じ、新農村建設運動を推進する。

(二) 農民組織の皆無、或いは弱体の県連は将来の農民組織の名称に捉われず、地域的独自性を考慮し、農村建設的な農民組織を結成する。

(三) 出来得ればこれらを全国的な単一組織体に四月頃までにする。

統一懇談会の結論

二月一七日衆院会館で第三回農民組織統一懇談会世話人会が開催され、川俣、中村(高)、稲富、佐野、藤生(開拓連)、オブザーヴァーとして全農連の宮下、加藤氏らが出席した。まず宮下氏から二月八日の農協党中央委員会における反共農民戦線統一、協同社会主義連盟の育成強化に関する決議が報告された。ついで全農佐野常任から反共の明示、日農に対する要望等に関する全農側の見解を表明し、種々協議の結果、つぎの「申し合せ」を行った。

(申し合せ)

統一懇談会は、統一を進めるに当り、統一の対象を全国農民連盟、全日本開拓者連盟、全国農民組合、容共派を除いた日本農民組合等とし、反共反ファッショの農民組織の統一を目的として邁進する。

ついで四月三日には前記四団体を中心とする統一懇談会が開拓会館で開催された。当日の出席者は全農杉山元治郎、細田綱吉、日農川俣、中村、開拓連凌、全農連中村氏らで、従来の統一運動に関する経過報告ののち、前回の世話人会の「申し合せ」事項を確認した。この懇談会で特に問題となった点は、開拓連代表より、統一運動に主体性派日農左派をも招請してはどうかとの発言があったことで、この提案をめぐって二時間余にわたり討議が行われた。これは、三月一九日の日農、全農、全農連、開拓連の四団体主催全国農民大会の後で、主体性派日農左派と開拓連の両者が統一懇談会への左派の参加について相談した結果、統一原則についてある程度の了解がついた結

果にもとずくものとされ、政治的中立を強く主張する開拓連としては、反共の線で一致する日農左派を除外することは好ましくないと判断したからであろう。懇談会における各派の発言要旨はつぎの通りである。（「農村建設新聞」第一〇号による）

凌氏（開拓連）

統一懇談会が反共の線で運動をおしすすめることは申し合わせにより異議はないが、日農左派が容共であるとは考えられない。自分としては農民団体が政党の影響によって分裂することは賛成できないのであって、もし日農主体性派のうちの一部の有志だけで一緒にやるということになると、政治的に一つの立場を支持する結果となり、わるくすると政党の分裂活動にまきこまれることになるので警戒しなければならぬ。

中村氏（全農連）

農業団体の統一体としては農業復興会議があるが、東畑精一氏が会長をやめるといって一年半も懸案になっており、農復の形態での統一活動は明らかにもう限界にきている。農民団体の統一戦線としては左派系の団体も右派系の団体もふくめた連絡機関をもつことを考えている。

杉山氏（全農）

農民団体の統一は、まず気のあった同志がしっかりしたものをつくる。ただ統一という形だけにとらわれると、内部における意見の相違によって対立をおこし組織をかえて弱めることになる。ただ共同闘争の形で農民団体として共通の運動を展開することには異議がない。

この外、数氏から意見の表明があり討議したが、結局前回の「申し合せ」における強力な中央機関の設置という項目はボカされ、各団体の自主性を尊重し、政治的中立を犯さぬためには、共同闘争委員会の形をとる外ないとの結論に到達した。そのため総連合とか総同盟等の名称をつけることも反対され、主体性派日農左派の代表をも加えて、次回の懇談会を開催することに決定した。

右の決定にもとずき、四団体の代表（中村、佐野、大森、凌氏）は同月一三日協議会を開き、共闘機関設置の具体的な問題について協議した。しかし、この四者協議の線とは別に、右派社会党を中心に、民社連、農協党の政治力結集懇談会が開かれ、いわゆる容共日農左派をのぞいて農民戦線を結集しようとする動きが見られるにいたった。つぎにそれを見よう。

日本労働年鑑 第26集 1954年版

発行 1953年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

****年**月**日公開開始